

判して生活の論理からのパラダイムの転換をせまる主張には大いに共感し、近年筆者らが社会的な生活過程本位の論理を復権させ、大資本および政・官・財癒着権力本位からの体制転換を主張することに大きな援軍を得た感を深めた。

そのうえであえてないものねだりをするとすれば、本書が「あとがき」で補足的に、急激な円高体制への契機として巨大な「生産マシン」化した日本企業の働かせ方と過剰蓄積にふれたことにつながることもある。本書はいわば一国資本主義としての日本資本主義の現代像を刻んでいる点で優れた業績をあげられたが、戦後日本資本主義論は対米関係のなかでしか解明不可能であり、とくに近年ではアメリカ的グローバリゼーション攻勢との関連に則して観察しなければ、現代の円高および為替換算での「高コスト」の体制や過剰資本・過剰蓄積、高失業とデフレ・スパイラルの悪循環も十分には解けない。本書が優れた「財政構造改革」批判をなされながら、「構造改革」をグローバリゼーションと関連させていないのは残念なことである。

もう一点、評者がよくわからない方法上の問題は、著者が「生活貧困化の経済理論」として、分配論に焦点を限定されたことである。内容的には、大企業の生産と資本蓄積の機構を分析され、労働とその成果の搾取・収奪機構を克明に分析されながら、分配問題に収斂させることの意義と限界について、説明が不足しているのではなかろうか。日本資本主義が資本主義としても特異な歪みをもつことを集中的に論証され、その資本主義的な改良の課題に限定するためだとすれば、それはそれである程度わかることではあるのであるが。いかがなものであろうか。(青木書店・2002年1月刊行・本体価格3600円)(あいざわ よいち・常任理事・高崎健康福祉大学)

グレゴリー・マンツィオス編

## 『新世紀の労働運動』

全国労働組合総連合編

## 『世界の労働者のたたかい』

階級重視にむかうアメリカ労働運動  
大木 一訓

アメリカの労働組合運動がそれまでの運動のあり方を大きく変え、それまでのビジネス・ユニオニズムといわれた実務的保守的な「運動」から社会的攻勢的な運動への転換を、さまざまな分野で押し進めるようになってから、もう7年が経過しようとしている。転機となったのは、1995年10月に開かれた、アメリカの労働組合ナショナルセンター AFL-CIO の大会であった。会長の座が運動史上はじめて選挙で争われることとなり、「アメリカ労働者のための新しい声」と称する批判派の運動を代表して立候補したジョン・スウィーニーが、AFL-CIO の指導権を握ることとなった。「労働組合は、ついに長く深い眠りから目覚めた」と評されたように、それいらいアメリカでは、労働組合運動の再構築をめざす活発な取り組みが展開されてきており、運動が昂揚にむかうなかでは、全労連『世界の労働者のたたかい』でも毎年紹介されているように、ストライキ闘争や協約改定、組織拡大等でも前進を勝ちとるようになってきている。

読者もそうであろうが、筆者はかねがね、このアメリカ労働運動の最近の変容と前進について、もっと全体的に詳しく知りたいと思っていた。資本主義社会における階級や搾取・抑圧の存在を否定し、産業社会を支える経営のパートナーとして労働組合をとらえ、強烈な反共主義に貫かれてきたアメリカの労働組合運動が、自

## 書 評

らを革新的な大衆運動へと脱皮させていくことになったとすれば、それは予想もしなかった画期的な運動の前進である。しかし、それは、決して容易なことではなかったであろうし、今日なおさまざまな困難をとまなっているのではないだろうか。また、その変容の過程には、わが国の労働組合運動が直面している運動再構築の諸問題とも共通するものが、数多く存在するにちがいない。いったい、アメリカ労働組合運動の最近の転換は何を意味するのだろうか。それは、いかなる運動理念に支えられ、具体的にはどのような新しい運動内容として展開されつつあるのか。また、大衆的な運動よりも職能団体的なロビー活動が中心だった AFL-CIO の活動が、なぜ、どのようにして、大きく改革されることとなったのだろうか。そうした転換を可能にした運動の力はどのようなものであったのか。新しい運動の担い手はどのような人々なのか、等々。聞いてみたい論点は山ほどある。

こうした疑問に、全面的ではないにしても、主要な点で説得的に答えてくれる著書等を最近まとめて読むことができた。戸塚秀夫監訳『新世紀の労働運動——アメリカの実験』や全労連が毎年刊行している『世界の労働者のたたかい』（最近号は本年5月刊行の第8集）、それに『海外労働時報』などである。とくに『新世紀の労働運動』は、1995年の AFL-CIO 大会の前夜にニューヨークのクィーンズ大学労働資料センターで、「21世紀に向けた労働運動」というテーマの研究討論集会在開催された際の報告集であるが、執筆者たちがアメリカの労働運動の実践に長年たずさわってきた人たちであり、また、前出の「アメリカ労働者のための新しい声」運動に参加して、労働組合活性化のための提言活動を実際にすすめてきた人たちであることもあって、アメリカ労働運動の新しい息吹を生々しく伝えている。（本訳書の原書 A New Labor Movement for the New Century は、その集会での報告を基に、1998年に編集・出版

された論文集で、訳書では21本の報告論文のうち16本が翻訳・収録されており、収録論文は、「第1部 民主主義、イデオロギー、変革」「第2部 未組織労働者を組織化する」「第3部 多様性と多様性の包括」「第4部 政党と政治」「第5部 国際問題」の5部に分けて編集されている。）

以下では、上記の文献・資料を参考に、最近のアメリカ労働運動の潮流転換について、注目される点をいくつか考えてみることにしたい。

### 1 プラグマティックな運動から民主的な社会運動への転換

アメリカの労働運動は、ながい間、自らの行動原理がプラグマティズムにもとづくものであることを自認してきた。それは、「世界観をもっていない」と主張し、「差し迫った現実的な関心のみが自らの指針」だと語り、「世界を揺るがすような展望や行動は慎重に避け、ただ労使間の力のバランスにおいて、より好ましい条件のみをもとめる」という運動であった。

『新世紀の労働運動』（以下、戸塚訳本）を読むと、そうしたアメリカ労働組合運動におけるプラグマティズムの影響は、いまや「その大部分が姿を消した」という。「草の根の組合主義、より視野の広い戦闘的な組合主義を取り入れた」ことで、大衆中心の活動や直接行動が重視されるようになり、新指導部は、労働者が直面している諸問題を解決するために組合はより広い役割を果たさなければならないと訴え、「革新的かつ人道主義的な民衆の声を代弁し、広範な人々との連携し、幅広い社会運動をつくりだしていこう」、と呼びかけている、という。著者たちは、「この変化は、思考と実践における革命ではなく進化である」と限定的な評価をしているが、そうした運動潮流が定着したとすれば、それは実に大きな運動基調の転換だと言えよう。

新しい労働潮流のもとでは、従前のようにサービスマンとしての組合を強調するよりも、民主

主義の担い手としての、また、社会運動の組織者としての労働組合が重視されるようになったことがわかる。そこでは、労働組合のとりえ方にも大きな変化が生まれている。「何よりもまず、労働組合はコミュニティをつくりだそうとしているのだ」「労働組合は民主主義の学校となる必要がある」「組合活動そのものを民主的実践のモデルとしなければならない」「労働組合は、民主主義と市民社会の擁護者とならなければならない」といった発言は、もっぱらプラグマティックな機能論から労働組合を問題としていたかつてのアメリカ労働運動では考えられない労働組合のとりえ方である。さらにすすんで、「労働組合の究極の役割は何か」、それは「職場と経済の領域で民主化をすすめ、社会総体の権力を転換し、権力と影響力と財力がが一手に集中する権威主義的な支配をうち破ること」であろう、という主張になると、これはわが国の全労連運動も提唱している民主的規制の思想とも共通する、社会変革の担い手としての労働組合というとりえ方さえうかがわせるものだろう。

こうした流れのなかで、労働組合運動は「人権のための運動」として再定義されるようになっているという。運動の質的転換が、女性、有色人種、ジャンターと呼ばれるビル清掃労働者など広範な不安定無権利労働者の運動への参加、セックスハラスメントや賃金・昇進差別の重視、青年や大学・地域をまきこんだ労働問題キャンペーン、組合員による大衆的な組織化運動、民主党から離れた独自の政治活動の展開、海外の虐げられた労働者を「助ける」ことから相互援助への国際連帯の転換、などとして、随所ですんでいることがわかる。

## 2 アメリカ労働運動の前進を制約するもの

しかし、アメリカ労働運動の最近の潮流転換については、その積極面とともに否定的側面もあることをリアルに把握しておかなければならない。この点では、戸塚訳本が率直に批判的分

析を展開しており、非常に興味深い。とくに、ジェレミー・ブレッカー（彼はアメリカ労働運動の現状を痛烈に批判してきたジャーナリストとして有名である）とティム・コストロが執筆した同書第2章「古い殻のなかの『新しい労働運動』か」と、編集責任者のグレゴリー・マンツィオスが執筆した第3章「労働組合は何のためにたたかうのか」は、アメリカ労働運動の歴史を総括しながら、最近の転換がもつ意義と限界について、透徹した分析と評価を示していて圧巻である。なかでも興味深いのは、次のような諸点である。

第一に、最近の運動の転換は、当初は、役員間の権力争いとして始まったものだったが、「行動的だが主流派の組合幹部とみなされていた」スウィニーとともに、戦闘的な幹部や女性・有色人種代表などが「ニュー・ボイス」の運動に共同して参加するなかで、「宮廷内の権力工作」をはるかに超える大衆的な組合改革のたたかいとして、急速に発展していったものであること、その過程では、「消滅の危機に瀕すれば、組合官僚でさえ変化する」という歴史の弁証法が作用したことが、明らかにされている。

第二に、そうした歴史の弁証法を生み出した労働運動内部の要因としては、①前例のない企業・政府の攻撃が行われるにつれて、協約を交渉し、妥結し、実施させることが、ますますむずかしくなったこと、②組合が成果をあげるためには未組織労働者を組織し、組合活動を取り巻く環境を変える運動をつくりあげなければならなかったこと、③労働組合は自己変革しなにかぎり減びていく運命にあることがはっきりしてきたこと、④その背景には、アメリカおよび世界経済の変化が労働力構成や労働生活にあたえたドラスチックな影響があること、が指摘されている。

ところで、第三に、AFL-CIOの新執行評議会においても、少数の大組合の会長たちが大勢を支配するという権力構造はなお続いていると

## 書 評

いう。それらの役員の多くは、労働運動の衰退に責任のある役員たちであって、そのなかに労働運動についてオルタナティブな見通しを抱くものは少ないということである。そして、密室協議による役員選出や議事録の非公開がなお維持されているような「内部民主主義の欠如」や、主要な大衆闘争に労働者を動員することにトップの役員たちがあまり熱心でない状況下では、「指導部が望んでいる改革とは、せいぜいビジネスユニオニズムの戦術化であり、活発な組織化やストライキ志向の拡大を、上からの統制と結びつけるもの」かも知れないと警告している。

第四に、AFL-CIO指導部は、過去の考え方、政策、慣習から多くの面で脱却しつつある一方で、まだ多くの点で古い仮定にとらわれ続けている、と指摘されている。具体的には、①結成いらい一貫して資本主義支持の立場をとり、アメリカの社会経済的秩序への信頼を大前提としてきたことが、労働組合の目的や活動範囲を制限してきたこと、②運動の中で生き続けてきた「労働と資本の間のパートナーシップ」というビジョンと、パートナーシップなどどこにもなく、あるのは敵対関係だけという現実との乖離、③CIAの労働組合版といわれた諸活動から脱却し、これまで接触をさせてきた労働組合との共闘をすすめるという課題、④「ニュー・ボイス」の運動とは明らかに矛盾している民主党および民主党候補を支持するという問題、⑤グローバリゼーションのもとでの、時代遅れの概念や闘争手段への依存（団体交渉偏重、交渉単位の定義、組合間の境界、先任権という概念、労働者の要求や利害についての狭い概念、経済成長がもたらす恩恵への信頼、一国的枠組みのなかへの埋没など）、といった諸点である。

要するに、アメリカ労働運動の革新的転換は、なお厳しいたたかひの過程にあるというのである。実際、その後、大統領選挙でAFL-CIOがゴア民主党候補を支持したこと、ブッシュ政権のテロ報復戦争についてもスウィニーが先頭に

なって支持していること、等を見ても、また、アメリカ支配層が国民の「愛国心」をあおり、アメリカ「帝国」の地球規模的構築に労働者たちを心身共に動員している状況からしても、アメリカ労働運動が自己革新をすすめるうえで直面している困難は、なお大きなものがあると言わなければならない。

### 3 階級意識ユニオニズムへの展望

しかし、開始されたアメリカ労働運動の前進は、けっして後戻りすることはないであろうと思われる。筆者がそう確信する理由は、戸塚訳本の第3章「労働組合は何のためにたたかうのか」や第11章「橋を封鎖する一階級を基盤にする政治と労働運動」をはじめ随所で、アメリカ労働運動はその運動理念を階級意識ユニオニズムへと発展させる時機を迎えているという、説得的な展望が示されているからであり、いま一つは、『世界の労働者のたたかひ』の各号で、その後のアメリカ労働運動が実際に大衆的発展をみせていることが報じられているからである。

たとえば、戸塚訳本で編著者のマンツィオスは要旨こう言う。

第二次世界大戦後のもっとも恵まれた時期においてさえ、繁栄の裏側では、人種的性的差別、都市の荒廃と環境破壊、労働疎外、貧困層、などの問題が存在した。今日では、アメリカの経済発展が今後も続くものとは仮定できなくなっており、経済構造の変化は過去の繁栄への復帰を不可能にさせている。経済成長と私利の追求がすべての人々の生活向上にむすびつくことになる、という伝統的な考え方は、いまやまったく通用しない。労働組合は、自らをとりまく環境の根本的变化を認め、企業社会アメリカとのパートナーシップの論理を拒否することを、いま求められているのだ。資本と労働の利害は明白に対立している。アメリカの経済構造が根本的に正しいという信念にしがみついていると身を滅ぼすことになる。階級意識に重点をおく見

方の方が、変化する現実に対して、より正確で効果的かも知れない、と。

そして実践的には、労働組合は、①資本主義が優れているという昔からの想定を放棄し、民主党が提唱する「成長指向」のイデオロギー的枠組みとも決別すること、②規制を忌むべき言葉から、利鞘稼ぎ、脱税、環境破壊、無責任な企業活動を暴く公共の監視のスローガンに変えること、③対立する諸階級の利害を明確化すること、④幅広い経済民主主義や平等の問題に積極的に取り組むこと、⑤労使対立を異常なものと思わないで体系的なものとして把握すること、⑥リベラル派への支持から独立した階級的政治を追求すること、⑦改良のイデオロギーから転換のイデオロギーへと力点をシフトさせること、が必要だという。

ここに示されているのは、まさに全労連運動も追求する階級的民主的な社会運動路線である。こうした議論がAFL-CIOの運動の中で公然と提起され議論されること自体、隔世の感のある出来事であるが、本書で見るかぎり、それは新しいAFL-CIOの運動のなかで大きな影響力を獲得しつつあるように思われる。

「ニュー・ボイス」の運動家たちは、アメリカにおける「階級意識ユニオニズム」の将来について比較的楽観的である。階級重視のアプローチは、今日では以前より現実的で実現可能になっていると言う。なぜなら、①階級的言動を外国の陰謀や反逆的陰謀に結びつけることが難しくなった、②アメリカン・ドリームの影響が失われ、労働者の幸福と株主や企業経営者の幸福とが相反する関係であることを、以前にも増して働く人々が強く意識するようになった、というアメリカ社会の変化があるからだ、という。筆者には、①アメリカの労働者たちが直接対峙しているのは、唯一超大国の権力であること、②社会全体に長年にわたる右翼的反共的風土があること、③労働者階級の利益を代表する政党や議会議員がほとんど存在せず、政治的発言力が

弱いこと、④マルクス経済学の伝統がないこと（本書を刊行した『マンスリー・レビュー』社の存在は大きいにしても）、⑤さらに、本書刊行後のことであるが、「同時テロ」後の世論の極度の右傾化、等を考えると、アメリカにおける階級的労働運動への前進は決して容易ではないと思われるのであるが、しかし、重要なのは、AFL-CIOの運動の中でこうした階級的潮流が有力な地位をしめるようになり、確信をもって運動の改革に取り組んでいる、という事実であろう。「21世紀の労働運動はなによりもまず階級的な社会運動でなければならない」というAFL-CIO運動内部からの発信が広く伝えられるようになるなら、それはアメリカ国内においてばかりでなく、わが国をふくめ国際的にも、非常に大きな影響を及ぼすことになるだろう。

#### 4 労働組合の自己改革への視点

関係文献を読んでいて、印象的だったことがいくつかある。

一つは、労働者たちをもっと確信的にし積極的にするような、運動の指導性の問題である。「労働者は勝算があると信じないかぎり、労働組合の勝利のために危険を冒したり、ストライキを続けたり、その組合のためにたたかったりはしない」「不正義に対して立ち上がり対決する意欲と能力は、対抗文化、構想力のある指導者、強い社会運動という背景があって初めて生まれるものだ」「刺激的な議論に終わるのではなく、実践に結実する主張をめざすべきだ」「なぜ今日のような事態になっているかを説明することに力点があるのではなく、それをどのように変えることができるかを提案することこそ目的でなければならない」等々。幹部・活動家としての責任感と労働者たちへの信頼に支えられた指導の問題である。

二つには、運動の「再活性化」をすすめるうえで、運動家と知識人との交流や協力・共同の問題である。本書の著者たちを見ると、その

書 評

多くは運動家であると同時に大学等での研究者やジャーナリストでもある、という人たちである。あるいは、大学の労働者教育部や労働調査研究所などが、労働組合運動の活性化に大きく寄与していることも印象的である。組合の役職者が大学等の研究者になる事例も珍らしくなく、運動家と研究者との協力はむしろ両者の融合といった方がよいほど緊密なことである。

三つは、国際交流のあり方にかかわってのことであるが、「ニュー・ボイス」に主導された新しい運動のなかでは、共通の課題についての国際連帯闘争が、大衆的なレベルで日常的に組織されるようになっていく。たとえば、「韓国政府が反動的な労働法を制定しようとした時も、数時間以内にアメリカの労働組合活動家は、全国にある韓国大使館や領事館前での抗議行動のため街頭に出ていた」という。そこには、グローバリゼーションの時代にふさわしい国際連帯の発展を見ることができる。

さいごに、本書を読んであらためて痛感させられたのは、ナショナルセンターの役割の決定的重要性であり、それを支えるさまざまな分野での労働者階級の草の根運動の重要性である。そして、今日の情勢の下では、どのようなナショナルセンターも自己革新に取り組まざるをえないという歴史的必然性が、アメリカ労働運動の場合にも貫徹していることである。

この点で注目されるのは、本書を監訳された戸塚秀夫教授の「解題」によると、ここに訳出された原書のかなりの部分は、すでに1999年頃に、連合総合組織局から内部向けの「教材」として『21世紀に向けた新しい労働運動』というタイトルで刊行されていた、という。AFL-CIOと緊密な協力関係をむすんできた連合が、それをどのように受け止めているのか、それが最近における連合運動の一定の変化に関連しているのかどうか、興味深いところである。

『海外労働時報』が毎月伝える動向からも、わ

れわれは、スウィニー指導部のもとでの AFL-CIO が近年大きな前進を勝ちとりつつあることを知ることができる。とりわけ注目されるのは、①組合のオルガナイザーやリーダーの養成、②「ユニオン・サマー」による青年への働きかけ、③リビング・ウェッジ（生活賃金）条例制定運動への取り組み、④未組織の組織化の精力的な推進、⑤「新たな同盟」とよばれる組合組織の活性化、などの点で大きな成果をあげてきていることである。なによりも組合活動全体が生き生きとしたものになってきたこと、草の根からの運動の前進の中で、長年にわたる組織率の低下に歯止めがかかってきたことは、特筆すべきことであろう。

それに加えて、運動の革新的変化を示す最近の特徴としてあげることができるのは、どうすれば労働運動の再活性化が可能かという問いをめぐっての、活発な批判的論議の発展である。「アメリカでは、不一致や論争を問題視したり、組織に忠実でないと見なす傾向が強く、論争を民主主義的運営にとって不可欠な要素だとは考えない傾向がある」と言われ、その点では「連帯と異見表明との共存」を誇るイギリスなどの労働運動に比べ民主主義の成熟度が低いと見られてきたアメリカの運動であるが、今日では、異なった意見の存在を認め、その討議と実践をつうじて運動の新たな創造力をつくりだしていくという、運動の民主的力量を蓄えてきているように思われるのである。

ともあれ、アメリカ労働運動がヨーロッパやアジアと共に民主的階級的に強化されつつあるという事実は、いまや労働組合運動が国際的に大きな昂揚と前進の時期を迎えつつあることを示すものであり、日本の労働者・労働組合をも大いに勇気づけるものであろう。

（『新世紀の労働運動』2001年12月緑風出版刊・4000円）

（『世界の労働者のたたかい 2002』2002・5月刊価額1000円）

（おおき かずのり・労働総研代表）